

藤田湘子の三十句 野本京 選

令和六年一月一日（2024.01.01）

愛されずして沖遠く泳ぐなり 『途上』

逢ひにゆく八十八夜の雨の坂

胸の底わくら葉たまるためておく 『白面』

孔雀まで吹かれて來り春の暮 『狩人』

百本の桔梗束ねしゆめうつゝ 『春祭』

鯉老いて真中を行く秋の暮

しだれつゝこの世の花と咲きにけり 『一個』

はくれんの散るやをみなを知りしごと

鳴るたびに秋の風鈴とぞ思ふ

ふるさとの海は鳴る海蓬餅 『去来の花』

藤の虻ときどき空くうを流れけり

戦争が過ぎ凧が過ぎにけり

かりがねや生死はいつも湯が滾たぎり 『黒』

をりをりの初心に秋はねこじやらし 『前夜』

月明の一痕としてわが歩む

日のみちを月またあゆむ朴の花

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ

水母にもなりたく人も捨てがたく

『神楽』

ゆくゆくはわが名も消えて春の暮

葛飾や一弟子われに雁わたる

闊歩して詩人にならうねこじやらし

梟が啼けば荒野へ還るわれ

時間からこぼれて冬のしじみ蝶

『てんてん』

死者とまだ訣れてをらず白木槿

今を在る者が愛弟子冬木の芽

大寒の一本の薔薇鳴りいづる

ぺしやんこの紙風船の時間かな

考への行止りより黒揚羽

霞む山はせをの連として見をり

木蓮の声なら判る気もすなり